様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　５ 月 ２６ 日現在

機関番号：３４４１８
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2021
課題番号：１６Ｋ０２９０７

研究課題名（和文）口語英語コーパスを利用した話し言葉への意識を高めるための言語活動・教材開発

研究課題名（英文）Developing language activities and textbooks aimed at raising awareness of spoken English with the use of spoken corpora

研究代表者
山崎　のぞみ（Yamasaki, Nozomi）

関西外国語大学・外国語学部・教授

研究者番号：４０３６８２７０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は第一に、口語英語コーパスを利用して、英語の話し言葉の相互行為性を反映させた表現や形式の使用実態を記述し、話し言葉文法研究の進展に寄与した。特に、聞き手による統語単位の拡張、That's what...のような指示詞分裂文、会話の語りにおける導入的this、発話末のthoughと右方転位構造（テール）が持つ談話的・語用論的機能を示した。
第二に、話し言葉文法研究を英語教育に応用し、話し言葉の相互行為的言語特徴に気づきをもたらすためにコーパスを言語活動や教材として利用する方法を模索した。これによって、学習者が即興的で相互行為的な言語の使い方に対する意識を高めることの意義を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の意義は、伝統的に書き言葉の記述が中心の英語研究においては副次的、二義的に扱われることが多かった話し言葉を中心に据えたことである。書き言葉文法の「乱れた」ものが話し言葉であるという観点ではなく、話し言葉には即興的・相互行為的なコンテクストを反映した特徴的な言語使用があるという立場に立つ本研究は、口語コーパスに基づいた実証的話し言葉文法記述の進展に寄与した。
さらに、会話の即興性に関わる相互行為的言語現象や会話のメカニズムに注意を向けさせる活動を英語教育に取り入れる試みは、従来の書き言葉中心の学習者文法に一石を投じ、実態に即した「発信型」英語力養成の進展に貢献した。

研究成果の概要（英文）：Firstly, this research, making use of spoken corpora, contributed to the study of spoken grammar of English by describing linguistic structures and expressions that reflect interactive features of speech. I dealt with structures and expressions such as syntactic expansions by listeners, demonstrative clefts such as "that's what...", introductory "this" in conversational storytelling, utterance-final "though", and left dislocation called "tail". I showed how these linguistic expressions perform their own discourse and pragmatic functions in spontaneous conversation.
Secondly, applying the linguistic study of spoken English to English teaching, I explored how spoken corpora can be used in language activities and textbooks to raise awareness of interactive features of speech. I showed how significant it is for learners of English to be be well aware of the spontaneous, interactive use of language in conversation.

研究分野：語用論、談話分析、英語教育

キーワード：英語の話し言葉　話し言葉文法　言語活動　会話の相互行為　語用論的機能　口語英語コーパス　発話末　右方転位構造（テール）

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

英語教育において４技能の一つである「話す」ことの重要性の認識が高まり、授業で口頭によるコミュニケーション活動が行われる機会は確実に増えている。しかし、教室内では「書いたものを読み上げる」というような書き言葉を中心に据えた言語活動が主のため、学習者は「書かれているように、あるいは書くように、話さないといけない」という意識にとらわれがちである。しかし現実の話し言葉は、無論のこと書き言葉を音声にしたものではない。自然発生的な会話は、会話者がリアルタイムに話順交替（ターンテイキング）を行いながら共同的・相互行為的に談話を構築しており、書き言葉とは異なる即興的な相互行為性を反映した言語使用がある。外国語の会話教育においては、学習者にただ「即興で話せ」と促すだけではなく、話し言葉の即興性に関わる相互行為的言語現象に気づかせ、意識化するためのメタ言語的な学習や活動が効果的なのではないかという考えに至った。

２．研究の目的

本研究の目的は、話し言葉の即興性や相互行為性に関わる言語現象に対する学習者の意識を高めるために、現実の会話を収めた口語英語コーパスを利用した活動や教材を開発することである。自然発生的な会話に特徴的な相互行為的特徴（非流ちょう性の言語現象や発話の即興的なやりとりに関わる言語現象）について、コーパスを用いて分析する。その研究結果を応用して、話し言葉における言語の使い方に気づきをもたらし、書き言葉とは異なる特徴を意識化するような活動や教材を提案する。

３．研究の方法

(1) 会話分析、談話分析、相互行為の言語学、語用論、コーパス言語学、英文法研究などの関連分野に目配りしながら、口語英語コーパスを利用した会話に特徴的な相互行為的言語現象の研究を行う。話順交替、即興性、共同的談話構築といった会話の即興的・相互行為的側面を反映した言語形式や表現を個別的・複合的に分析し、語用論的機能や談話機能を記述する。

(2) 話し言葉の言語使用に気づきをもたらし、意識化させる学習方法・言語活動を開発する。話し言葉コーパスを用いて編纂された英語教材（国内・海外）を収集し、話し言葉に特徴的な言語現象をどのように扱っているか調査する。さらに、話し言葉の相互行為的言語特徴に気づきをもたらすためにコーパスを教材としていかに利用できるかを模索し、話し言葉への意識を高めるための活動や教材を提案する。

４．研究成果

(1) 口語英語コーパスを用いた「話し言葉文法」の解明

第一の研究成果として、口語英語コーパスを利用して、話し言葉の相互行為性を反映させた表現や形式の具体的使用実態を記述し、英語の話し言葉文法研究に寄与した。英語の会話データとして、自然発生的な会話を収めた英語の話し言葉コーパス（主として British National Corpus (BNC)、International Corpus of English: Great Britain (ICE-GB)、The Spoken British National Corpus 2014 (Spoken BNC2014)）を質的・量的に利用した。

「英語の『話し言葉文法』研究と教育的示唆」（『現代英語談話会論集』、第 11 号、pp. 69-85、2016）では、英語の話し言葉コーパス編纂と、それと軌を一にして発展した「話し言葉文法」研究の発展について文献調査を行った。話し言葉コーパス誕生以降の「話し言葉文法」研究の流れを概観しながら、英語の「文法」に対する考え方の変化や異なる観点を論じ、英語教育への示唆も行っている。また「会話を書き起こす—トランスクリプトの実際と可能性」（『現代英語談話会論集』、第 12 号、pp. 25-42、2017）では、異なる背景や理論的枠組の中で発達した複数のタイプの会話表記方法を具体的に検討した。異なる表記体系による会話のトランスクリプトの実例を検討しながら、会話の実証的研究に不可欠なトランスクリプトがどのように作成されるのか、また、どのような情報を表し得るのかという点について明らかにした。以上の 2 本の論考は本研究の背景や方法の土台になった。

「話し言葉文法」の解明に向けて、具体的に以下のような言語現象や表現・形式を扱った。それぞれについて得られた成果や位置づけを①～④に記す。

①　聞き手による統語単位の拡張

「聞き手による統語単位の拡張—副詞節の場合」（『ALBION』、京大英文学会、第 62 号、pp. 58-71、2016）では、話者同士の共同的談話構築を反映する言語現象の一つである聞き手による統語単位の拡張、特に副詞節を用いた拡張に焦点を当てた。以下の A の発話が一例である。

B: Yes　I mean I always <,> I'm very frightened of losing him so <,,> Yeah　I was sort sort of asking him again

A: Yes <,> <u>Cos</u> you want to get back together <,>

(International Corpus of English: Great Britain, S1A-050)

B の発話に対して別の話者 A が because 節で統語的に拡張しており、両者が共同でひとまとまりの統語構造を持つ発話を産出している。このような副詞節による拡張は、ターンテイキング組織やターンスペースの認識に関わっており、語彙と文法の両面から話者同士がお互いの発話を関連づけていることを示す。聞き手による副詞節での拡張は、副詞節の従属性という統語面と、情報を断片的に付け足していく会話言語の特徴、さらに談話の共同構築という相互行為面が交錯する現象であり、多面的分析が必要である。

② That's what ...

That's what I thought. / That's how I spent summer vacation.のような指示詞分裂文と呼ばれる形式は、状況依存の程度が高い話し言葉に特徴的な表現形式であり、書き言葉より会話で高頻度で使われている。「話し言葉における that's what…について」(『現代英語談話会論集』、第 13 号、pp. 15-30、2018）は、この構造が会話でどのように使われているか、デレビドラマの会話をデータにして分析した。分析の結果、that の指示機能の柔軟性と what 節の明示性の低さが、that's what…の談話調整力を高めていることを主張した。反復性と定型性の高いこの構造は、状況や話者間の関係に配慮しながら会話の方向性を調整したり、婉曲的・推測的に伝えたりするための形式の一つとして話し言葉で活用されていることを示した。

③ 導入的 this

会話の語りにおいて、以下のように新情報の人やものを this を使って導入することがある。

I saw in the news. There was <u>this woman</u> in Peru. She woke up after ten years.
(*Desperate Housewives*, S3, E1)

先行談話に既出の要素でもなく、聞き手とも共有しておらず、話し手の頭の中のみにある観念上のものを導入する際、通常は「ある～」という意味の不定冠詞を使うのが一般的である。しかし、インフォーマルな会話では、上記のように新情報の導入に this が使われることがある。この導入的 this の使用について、「語りにおける導入的 this—this が導く名詞句の形式と談話機能」(『現代英語談話会論集』、第 14 号、pp. 37-53、2019）で名詞句の形式や発話の語彙文法パターン、さらに語用論的意味やスタイル的特徴を論じた。さらに「コロケーションから見る導入的 this の談話的特徴—there was this NP を中心に—」(『関西外国語大学　研究論集』、第 113 号、pp. 1-19、2021）では、会話の語りで見られる初出の要素を導入する this の特徴を、生起環境や談話構造との関連で説明した。共起語には、ターン交替を一時停止する語句や、新情報導入の準備となる前置き的表現が見られた。また、「外向き・上向き」「移動・終了」のイメージの語句、語りのハイライトや重要な展開を示す語句も特徴的だった。さらに会話のリアムタイム性や双方向性を表す言語特徴も共起しており、聞き手との相互作用で語りの進行や展開がなされていた。

④ 発話末の though とテール

話し言葉では、書き言葉では使われない要素が発話末に見られることがあり、様々な語用論的機能を実現している。以下のような発話末の though もその一つである。

S0654: you're wearing red mum that's a lucky colour
S0653: mm yeah
S0654: I don't think I have a red necklace <u>though</u>
S0655: wow you're really lucky mum (Spoken BNC2014: SXPW)

『英語のエッセンス』(現代英語談話会（編)、大阪教育図書）の第７章「発話末の though が表す対人関係的意味」(pp.77-87）では、発話末の though が、発話と発話の対比的関係を並列的に示す談話調整機能を持つことを指摘し、さらに話者同士の対人関係的な意味の産出にまで関わっていることを示した。発話末の though は、その発話が、その前の発話と両立はするが対立するという二側面の関係づけを振り返って行うものである。発話末で使われることと、両立と対立の両方を含意するという though の特徴が、談話の調整だけではなく対人関係の調整や交渉を可能にしている。前の発話が相手のフェイスを脅かす場合と though を伴う発話が相手のフェイスを脅かす場合があり、発話間の両立と対立のどちらの関係性によりフォーカスを当てるかという選択が、話者の様々な対人関係的な配慮や交渉と関係していることを明らかにした。

さらに「ターン交替／ターン継続に関わる発話末 though の機能—イギリス英語の会話コーパスを用いて」(『語用論研究 (S/P)』、第 22 号、pp. 33-50、2021）では、最新の話し言葉コーパスである Spoken BNC2014 を用いて、会話における発話末の though とターン交替／ターン継続機能との関連を分析した。発話末の though は、付加疑問や右方転位構造など他の発話末要素の相互行為的な役割と連動することでターン交替をもたらす可能性が高まることが示唆された。一方で、対比・不調和の談話関係を表す though の談話調整機能が、though のターン維持機能に大きく関わっていることが分かった。

また、別の発話末要素に関する研究を、「付加疑問との連鎖関係からみたテール（右方転位構造）の機能—イギリス英語の会話コーパスを用いて—」（『英語コーパス研究』、第 28 号、pp. 27-46、2021）で発表した。話し言葉に特徴的な言語形式の一つに、下記のようなテール（tail）と呼ばれる右方転位構造（right dislocation）がある。

S0653: that’s in Back to the Future as well <u>that song</u> isn’t it? (Spoken BNC2014: SZFG)

右方転位構造（テール）が発話末で付加疑問と共起する場合、その連鎖関係がテールの機能にどのように影響するかという点について分析した。その結果、テールが付加疑問と共起する順序によって、テールが果たす主な語用論的・談話的機能に違いが見られることが分かった。発話末要素の連鎖が構造を持っていることを示唆するものである。

(2)　言語活動や教材開発への応用

第二の研究成果として、上記のような言語研究を英語教育における言語活動や教材開発へ応用する方法を探った。「話し言葉に対する意識を高めるための言語活動の意義と方法—文法教材調査を通して—」（『関西外国語大学　研究論集』、第 106 号、pp. 27-44、2017）では、話し言葉と書き言葉の異なるスタイルを学習者に意識させるための方策として、「話し言葉文法」を教える意義と方法を論じた。話し言葉に特有の言語の使い方を意識的に学ぶことによって、正誤に基づく規範的な文法ではなく、状況によって選ばれやすい言語形式が異なるというコンテクストに応じた言語使用の視点を養うことができる。このようなレジスターによる文法的選択の違いを学習者に意識させるためにはどのようなタスクやアクティビティが可能かを探るためにいくつかの文法教材を取り上げて、タスクの目的や形式などを調べた。

話し言葉やレジスターへの意識をもたらす方法として、レベルに関わらず様々な形式のタスク・アクティビティが可能である。空欄補充や選択式問題など伝統的な形式のタスクもあれば、程度は異なるが帰納的アプローチを取り入れているものもあり、着目させたい会話の特徴や目的、レベルによって使い分けることができる。談話標識や省略、発話末のタグ表現など話し言葉に特有の構造や用法に特化したタスクの場合、使い方や働きを帰納的に導き出させることもできるが、その形式や構造を見つけてマークさせるだけでも意識化することは可能である。言語サンプルを比較させてどちらがより（イン）フォーマルかを問う二者択一的なタスクも取り組みやすい。スタイルに関する知識が必要な総合的なタスクやアクティビティは難度が高く帰納的手法が目立つが、観察や比較など学習者の学習経験や言語経験に基づいて行える形式をとることもできる。また、個別的、総合的アクティビティのどちらでも、問題文のレベルや長さを調整すれば、学習者のレベルに関わらず実施可能だと思われる。さらに、答えが一通りでない問題は、議論を通してスタイルやコンテクストの視点を深め、言語感覚を養うことができるだろう。このようなタスクやアクティビティは、言語が社会の様々な状況や人間関係の中で果たしている働きや機能について理解を深めることができ、豊かな言語感覚の発達に寄与する。言語の使い方や仕組みを分析するメタ言語的な能力の育成はことばを使う能動的な態度を育てることに通じ、広い意味の教育としても意義があると主張した。

さらに「会話のスタイル」（『英語のスタイル—教えるための文体論入門』、編著者・豊田昌倫・堀正広・今林修、その他執筆者 16 名、第８章分担執筆担当、pp. 87-101、研究社、2017）では、ターンテイキングと相づちがどのようになされているかを示し、スピーキング指導へ活かす方法を紹介した。また、「英語教員のための夏期リフレッシャーコース」（関西外国語大学、2021 年 8 月）でも「『話し言葉文法』研究の英語教育への活かし方」と題する講義を担当し、「話し言葉文法」研究で明らかになった英語の話し言葉の実態を、英語教育さらには言語教育に活かす方法について紹介した。

本研究で明らかになったことの一つに「聞き手の役割」の重要性がある。話し言葉研究においては、これまで話順（ターン）を保持した話し手の発話に重点が置かれ、聞き手の役割（リスナーシップ）に関する研究は不十分だった。英語教育のスピーキング指導でも「話す」ことに比重をかけ過ぎ、いかに「聞く」かというリスナーシップの視点に欠けていた。本研究は、口語コーパスを用いた会話の相互行為面に気づきをもたらす活動によって、会話は話し手と聞き手が協同で構築するものであり、「話す」ことの要素の中には「聞く」ことも組み込まれているという認識を学習者に促せることを示すことができた。今後はこの観点から、英語研究と英語教育を連携させた取り組みを一層、進めたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計9件（うち査読付論文　5件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 山﨑のぞみ	４．巻 22
２．論文標題 ターン交替／ターン継続に関わる発話末thoughの機能―イギリス英語の会話コーパスを用いて	５．発行年 2021年
３．雑誌名 語用論研究（S/P）（2020）	６．最初と最後の頁 33-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 山﨑のぞみ	４．巻 113
２．論文標題 コロケーションから見る導入的thisの談話的特徴―there was this NPを中心に―	５．発行年 2021年
３．雑誌名 関西外国語大学　研究論集	６．最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18956/00007949	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 山﨑のぞみ	４．巻 14
２．論文標題 語りにおける導入的this―thisが導く名詞句の形式と談話機能	５．発行年 2019年
３．雑誌名 現代英語談話会論集	６．最初と最後の頁 37-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 山崎のぞみ	４．巻 13号
２．論文標題 話し言葉におけるthat's what...について	５．発行年 2018年
３．雑誌名 現代英語談話会論集	６．最初と最後の頁 15-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 山崎のぞみ	4．巻 12
2．論文標題 会話を書き起こす―トランスクリプトの実際と可能性	5．発行年 2017年
3．雑誌名 現代英語談話会論集	6．最初と最後の頁 25-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 山崎のぞみ	4．巻 106
2．論文標題 話し言葉に対する意識を高めるための言語活動の意義と方法―文法教材調査を通して―	5．発行年 2017年
3．雑誌名 関西外国語大学　研究論集	6．最初と最後の頁 27-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 山崎のぞみ	4．巻 11
2．論文標題 英語の「話し言葉文法」研究と教育的示唆	5．発行年 2016年
3．雑誌名 現代英語談話会論集	6．最初と最後の頁 69-85
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 山崎のぞみ	4．巻 62
2．論文標題 聞き手による統語単位の拡張―副詞節の場合	5．発行年 2016年
3．雑誌名 ALBION	6．最初と最後の頁 58-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 山﨑のぞみ	４．巻 28
２．論文標題 付加疑問との連鎖関係からみたテール（右方転位構造）の機能―イギリス英語の会話コーパスを用いて―	５．発行年 2021年
３．雑誌名 英語コーパス研究	６．最初と最後の頁 27-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 山﨑のぞみ
２．発表標題 付加疑問との連鎖関係からみた右方転位構造（テイル）の機能
３．学会等名 英語コーパス学会第46回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 山﨑のぞみ
２．発表標題 「話し言葉文法」研究の英語教育への活かし方
３．学会等名 英語教員のための夏期リフレッシャーコース（関西外国語大学）
４．発表年 2021年

〔図書〕　計2件

１．著者名 現代英語談話会（編）	４．発行年 2019年
２．出版社 大阪教育図書	５．総ページ数 197
３．書名 英語のエッセンス	

１．著者名 （編著）豊田昌倫・堀正広・今林修　その他執筆者16名	４．発行年 2017年
２．出版社 研究社	５．総ページ数 294
３．書名 英語のスタイル―教えるための文体論入門	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関